

秋期福音特別集会 (大阪)

狭き門

— マタイ伝第7章7～14節 —

1978年11月4日

小池辰雄

神のドラマ 無条件に入れる あるがままキリストの中へ もう与えられている 無条件に吸っている ただ一つ無条件に善きもの 霊然 私自身をお前にやるよ 獅子と豹と狼 地獄の門 煉獄の門 十字架という門 神の行為 十字架の愛の行為 針の孔 三相一貫・一如 生命に至る門 エン・クリスト 御霊の世界は自由自在 大自然のように 祈り

【マタイ7】

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、10 魚を求めんに蛇を与えんや。11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。12 然らば凡て人に為られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。

13 狭き門より入れ、滅びにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る者おほし。14 生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

● 神のドラマ

聖書は、私は教訓の書と思つてない。「キリスト教」なんていうと、なにか教訓かと思つているが、聖書はドラマです。創世記から黙示録にいたるまで神のドラマです。シエークスピアのドラマもありますが、シエークスピアは世界最大のドラマティストですけれども、聖書は超特級の神さまのドラマである。それでないと、聖書は読めない。人間のあらゆる現実がこの中に暴露されている。そして、この世は混沌と闇の世界だ。光は相対的にはありますけれども、それを光の世界に変えようとしておられるわけですが、なかなか変わらない。そういった光と闇の交錯しているところのドラマです。

聖書は最高のドラマですから、これを傍観しているわけにいかない。この中に自分を入れて、そのドラマの一役を買って読まないダメです。一役買ってその劇中の人物となる。その場その場によって役はいろいろ変わってきます。ペテロが神殿の所にやって来て、生



まれつきの跛者あしなえがそこで何か貰おうとする。そうすると、自分がその跛者になり、また自分がペテロになる。まあいろいろ一人二役で結構です。

とにかく、そういったドラマと思つて、その中に自分を投げ込んで読まない限り——実は「読む」のではない、自分を投げ込んで神の言を聞く、神の業に自分を任せる——そういう現実にして、これにぶつからない限り、聖書の門は開かれない。

●無条件に入れる

「聖書研究会」なんていつて、

「ギリシア語やヘブライ語を一生懸命に勉強して参考書をたくさん読めば、そういう人ほど、より聖書が分かる」

なんて思つたら、とんでもない間違いです。私は研究を蔑ろないがしにするわけじゃない。それでは入れない。しかし、一番素晴らしいものは、誰でもが無条件に入れる世界です。

「学問がなければ、ギリシア語やヘブライ語を知らなければ」

とかいう条件がついているでしょ。人間は条件をつけたがる。ところが、神さまは無条件です。キリストというかたは無条件に素晴らしいものを、この世の如何なる哲学も文学も芸術も、何もかも、事業も政治も経済も、与えることのできないものを与える。一番私たちに必要なものを与えようとしていらつしやる。これは無条件です。

今私が言った「無条件」という言葉の頭に「無」という字があるでしょ。私は無という字は大好きです。これは、

「天蓋の下に廿にじゅうと廿にじゅうの、四十の林」

と書く。天蓋の下の四十の林の木の数は数えられるかというのと、これは無数だという。「数えられない」という字が「無」という字です。無数、無限無量、無条件、無限定。もともと無という字はそういう意味をもっている。私は或る漢字の本を見たら、無という字はそういうように書いてあつた。だから、私はすぐそのことを思つた。

今は、漢字をいい加減に制限したり略したりしているのは大間違いだ。もともと、平仮名もカタカナも全部これは漢字から来ている。そういう感じ方をしてもらわなければダメですよ。そういうことで、皆さんは、漢字を世界最高の文字だと思つて尊重してください。

●あるがままキリストの中へ

何でも、身に付けないことには本ものでない。私はお説教しているのではないですよ。やむにやまねずして語らしめられているだけの話です。皆さんも、やむにやまねずして聞いていてください。頭で聞いたつてダメです、全身で聞かなくては。そういう角度と言いますか、これが非常に今は失せてしまった。だから、何年研究しても、何年教会に通つても、大体終いにくたびれてしまつて、



「もうこの辺でよそう」
なんていうわけです。

キリストは弟子をたくさんつくりましたか。イエスの本当の弟子は、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロぐらいしかいない。ところが、本ものが一人できると、それが動かしていく。皆さん、本ものになってくださいよ。これだけ本ものがいたら大変なことになる。ウソものはつまらないですからね。これは無条件の世界だから。

「聖書の勉強がどうだ。まだ人の愛し方が足りない。まだ頑^{かたく}なで困る。もう少し信仰を深くしないではいかん」

なんて、みんな条件を考えている。何も要らん。あるがままキリストの中へ入っていきなさい。そういうドラマだから。そういうつもりで聖書にぶつかってください。文字だから、仕方がないから読むけれども、本当は文字ではない。文字の奥の響き、神の声、神の手、これにぶつからないことには始まらない。そういうことですから、そういう真先の、根底の、いわゆる態度ならざる態度が、八方破れの態度が、これが大事なんです。

●もう与えられている

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば

開かれん。

「求めよ、然らば与えられん」

という。キリストは、何を求めよと仰らない。どういうふう^{ふう}に求めよとか、どんな場合に求めよとか、こういう場合はこうだとか、そういう条件付きのことは何もおっしゃらない。非常に断定的な、断言命法的なことを言われる。

この頃は一生懸命で賃金問題で求めてばかりいて、求めたらそのうちに与えられるかと思つたところが、ちよつとも与えられない。そこで、聖書は間違つているかと、そう思うかもしれない。そんなもんじゃありませんよ、この「求め」というのは。それでは、

「私はまだ求め方が足りないから、なかなか与えられない」

と、一生懸命になりますよね、悪くはないですよ。尋ね方が足りないのです、なかなか見えない。門の叩き方が足りないから、なかなか開かれない。一応、そう思ってください。けれども、こつち側の求め方だとか、尋ね方だとか、叩き方だとか、そこには問題はありますけれども、それによってどうこうじゃない。神さまの方では与えようとしている。見出すようにしようとしている。開こうとしておられる。神さまの本願が先なんだ。小さい子供が、

「お菓子ちょうだい」

と言えば、お母さんの方では、

「お腹がすいたろうから、もうやろう」



と知っている。そういう本願が先だと言うんです。もう一つ私は言います、もう与えられているんです。見い出されているんです、現実は見い出されているから、いよいよ叩け」

「与えられているから、求めろ。見い出されているから、いよいよ見い出せ。開かれているから、いよいよ叩け」

と、そういうことなんです。「それはどういう意味か」ということはもう少し後で申し上げましょうね。「意味」と私は言つたけれども、聖書は意味ではない。すぐ

「この意味はどうだ、あの意味はどうだ」と、解釈学とか何とか言つてね。私はああいうのは嫌いだよな。まあ、私みたいな乱暴なものの言い方をすると、

「あの野郎はデタラメだ」

と思うでしょうね、大体。ところが、これはデタラメではないんです。私は皆さんに、この所を今、聖書講義をしようと思つていてのではない。

ずっと読んでいきましようね。

。すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。

「開かれるであろう」と書いてない。「開かるるなり」とある。よく口語訳では、「…であろう」なんていう訳がある。私はなぜ文語訳が好きかというところ、文語は断定的な言い方が多いからです。未来の事であっても、断定して一向に差し支えない。信仰の世界は蓋然性がいぜんの世界ではない。断定、現在完了。一人称と二人称です。三人称ではない。三人称的に書いてあつたら、それは中身を一人称や二人称に直して読んでください。「エホバ」(三人称)と書いてあつたら、「我(神)は」(一人称)と、神さまは「我は」と言つていてと思つて読んでください。私という人間は、そういうギリギリの現実でなければ生きていられないんです。

●無条件に吸っている

空気を思つて生きていますか。

「我思う故に我在り」

なんて言うが、

「我、空気を思うゆえに我あり」

なんて言えますか。空気は無意識に吸っている。無条件に吸っている。眠つていても吸っている。我々の自然的生命に一番密接なものは空気でしょ、気でしょ。見えないけれども、これほど有るものはない。これほど直じか々に有るものはない。無価値です。水は、ある時はお金で買わなければならぬ。けれども、空気は無条件にただです。これが我々の生命に一番大事な、絶対無条件の世界です。我々の魂に絶対無条件なものがあるのに、

「それだけはやらない」

と言って、考えたり、いわゆる信じ込んだり、そんなことをしているから、くたびれてしまふ。そういう無条件の世界ですから。

空気を吸っているんです。ヘブライ語で「ルーアツハ」、ギリシア語で「プニューマ」という。要するに「気」です。「元気がない」なんていうが、魂の気なんだ。「気魄」なんて言うね。魂も空気と同じように、無条件に大事なものがある。一番無条件に大事なものを

「それだけはやりません」

とやっている。だから、いつまでたつても始まらない。東西古今の偉大な宗教家は、また名も知れない本ものは、みんなこの気を魂の気としてしているわけです。

●ただ一つ無条件に善きもの

9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、

10 魚を求めんに蛇を与えんや。

蛇はちよつと魚に似ているし、パレスチナの石ころは丸いパンに似ているものだから。

11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。

おもしろいね、キリストは。

「汝ら悪しき者ながら」

なんて、私たちのことを「悪しき者」という。キリストは無条件に私たちのことを悪しき者とおっしゃった。キリストは自分でも善き者と仰らなかつた。

「善き師よ」

と呼ばれたら、

「なぜ、私のことを善き師よと言うか、神さまのほかに善きものはない」

と仰った。我々はしようがないやつだ。性善説なんてのもあるし、性悪説なんてのもあるけれども。孟子なんていうのは性善の方だけれども。相対的には善いものも、悪いものもありますよ。けれども、絶対的な意味ではどうも善くなさそうだな。それを「罪びと」と言う。神さまと本当に直結すれば、罪びとでなくなるけれども、直結できない。それなのに、「善きものを与える」という。

まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。

これはルカ伝ではご承知のとおり、「善き物」は「聖霊」と書いてある。善きものとは聖霊である。ただ一つ無条件に善きものは聖霊である。

●靈然

哲学者カントは



「この地球上においてもまた地球の外においても、無条件に善きものは善意の他にない」と言った。

「善き行いも、それは無条件に善と言えない場合がたくさんある。人間の善き意志、これだけが無条件に善い。それは深山の中のダイヤモンドの如くである」

と、感激して哲学者カントは言った。ところが、この「善意」なるものは現実にはない。現実には神さまの意志の他には無条件に善なる意志はない。哲学者はそう言いましたが、それはいくら現実になくても、哲学的な原理としては、思索の上の真理としては言わざるをえない。

数学の方だつてそうでしょ。現実には直線というものはない。けれども、直線というものは幾何学的には考えざるをえない。現実には直線はない。どんなに光線が真っ直ぐに進んでいても、これは歪んでいる。アインシュタインが素晴らしいことを物理学の方で言つたでしょ。アインシュタインの物理学なんていうものは、本当に分かるやつは世界に幾人しかいないそうだな。それでも、真理は真理です。

神さまの意志だけは、善なる意志である。だから、この神の意志に自分を投げかけたのがキリストである。善きものは神さまの他にない。

「汝の意志を成させ給え。わが意志に非ず、汝の意志を」

と言つて、神の善意に自分を全托した。

ところが、今の若い人は

「そういうのは、まあ、それは困るよ」

なんて言つて、すぐ「自主だ」とか、「自由だ」とか言つて、やっているわけだ。自由だとか、自主だとか、そういうことを言いたかつたら、マルチン・ルターの『クリスチャンの自由』とカントの『道徳哲学』を先ず読んでからでなければ、言つてはいけませんよ。

「お前はそれを読んだか」

と。若い人たちはマンガばかり読んでいます。日本はマンガ亡国ですね。マンガと週刊誌が氾濫して、こんな国はちよつとないのではないですか。こないだ、外人がテレビのコンクールでやっていました。

「二体、こんなことをして、日本はどうなるんですか」

と。外人にやられてしまった。テレビも無制限にやっているし。もう、困ったもんだよ、正直。

自由とは、本当の法則にのっかることが自由なんです。キリストは天衣無縫の、本当に神の意志に自分をのっけてしまったから、大自然より素晴らしい自然な歩き方をなされた。これを私は霊然と申し上げている。



●私自身をお前にやるよ

その善きものというのは神の意志の他にない。我々に与えようとしているのは、この聖霊である。聖霊の話は、今度の集会で畳みかけて言いますから。話をするのではない。皆さんと一緒にその中に入っていこうというわけです。今、キリスト教界ではこれが焦点だから。もう私は今から十何年も前にそのことを言っているんだけど。

私みたいなやつは、要するに、地上では誤解され、理解されなくてお終いになるだろうと、私は正直思っています。いいんだよ、それで。ただ、本ものだけは、私は絶対に言わないではいられないから、どう思われたってしょうがない。私は

「アナテマ魂」

という文を書いた。私の話は、そういうように、ドラマチックに展開していきます。論理的構造ではないですから。

キリストは聖霊を本当に与えようとしている。

「求めよ、然らば与えられん」

とは、実は聖霊であつた。もうひとつ言えば、

「私自身をお前にやるよ」

ということですよ。では、

「或る人がキリストをもらってしまつたら、あとの人はどうしてくれるか」

なんて思うかも知れない。そうじゃない。キリストはいくらでも分身できる。しかも、それが全きにおいて。それが霊界の神秘なんです。それが聖霊の世界です。

「聖霊は神が人類に賜う最大の賜物である」

と内村鑑三先生も言いました。

使徒行伝のパウロ、ペテロ、ヨハネの、あの使徒行伝の次元は大変なものです、あの現実。これはもう、ぶつ倒れながら読まなければ読めない。呑気な顔して読めないんです。ぶつ倒れるくらいにならなければ、聖霊の世界に入れない。

「我は門なり」

という。キリストは門ですから、

「我に体当たりしろ」

と。キリストという門に体当たりしていく。

●獅子と豹と狼

門といえば、ちよつと思ひ出した。ダンテが『神曲』の中で太陽の輝いている山に向かつて登ろうとした。そうしたら、道でもつて三つの動物にでつくわした。獅子ししと豹ひょうと狼ろう。この三つの動物が自分の行く手を阻はばんだものだから、とうとう仕方なしに引き返した。あの三つの動物のことは、エレミヤ記から彼は引用した。獅子は傲慢の象徴です。人間の一番



悪い罪は傲慢なんです。これはサタンの性格だから。サタンは神に対して反逆をしたところの傲慢者です。あの蛇をして言わしめて、

「お前たちはこれを食べると神の如くなる」

なんて言い方をした。サタンの心根はそういうところにある。身勝手な、

「自分さえよければいい」

なんて、今の民主主義が大分そういう傾向がある。

豹は肉欲の象徴。狼は貪婪どんらんの象徴です。ダンテは、

「この三つのものには勝てない」

と言って、それですごく道を引き返して、谷間で茫然ぼうぜんとしていたら、何か影が見えて来た。

「あなたは影だか人だか知らんけれども、助けてくれ」

と。そこに詩人（ウエルギリウス）が現れ、

「お前は別の道を往け」

と言われる。彼は詩人に導かれて地獄と煉獄を遍歴して、天国に往く。いきなり山に登れないんだ。先ず地獄を通って往く。罪を徹底的に認識しろという。地獄の鬼の姿は一つ一つ自分の中にあるというわけです。そういう深刻な自己認識なんです。だから、ダンテは呻いたり、嘆いたり、ぶっ倒れたりするんだ。

●地獄の門

その地獄の門に何と書いてあるかという、

「此処を通ってこの国に、この都に入る者には、もはや一切の望みを捨てる滅びへの門

である。絶望への門である」

と書いてある、有名な言葉です。しかしながら、その書かれている地獄の門はどうしてつくられたかという、

「神の義と愛がこれをつくった」

という。ダンテという人はそういういった秩序を非常に重んじた魂です。

地獄の罪の配列をみると、感情的な衝動的な罪より、意識的な罪の方が悪い。結局、最後はサタンですけれども。策略をもちいたり、人を陥れたり、意地悪をしたり、いろんな権謀術数をする、そういった罪が一番重い。衝動的な、感情的な罪はむしろ軽い。そういう配列になっている。

●煉獄の門

地獄の門はそういうわけですけども、今度は煉獄の門がある。浄罪山です。地球の中心を抜けて南の方にある。円錐形を逆さまにしたような地獄ですから、それが今度は南の方で――ダンテの想像ですけども――それが山になっていて、煉獄になった。煉獄の山



がそれのできた。それを登って行く時に門がある。その門にこう書いてあった。

「門が一つ見えた、その下にはそこへ通じる色を異にする二段の石段があった。」

番兵がいたが、いまだに一言も発さない。

私は目を少しずつ見ひらいて注意した、

最上段に番兵が腰掛けていたが、

その顔はまともに見ることができない。

手には白刃の剣を持ち、

それが光を照り返すから、私は

しばしば顔をあげたが眩しくて目がくらんだ。

……

私たちはそこへ来た。第一の段は

磨きあげられたように滑らかな白の大理石で、

私の姿がそこにありのまま映った。

第二の段は青紫よりも濃い色をした

粗い焼石で、

縦横に亀裂がはいっていた。

第三の段は最上段だが、重みのある斑岩で、

血管からほとばしる鮮血のような

燃えるような色をしていた。

この最上段に天使は両脚をつき、

門の闕の上に腰をおろしていたが、

闕の方は金剛石でできているらしい。

先達に手を引かれて私はいそいそとその三段を上った、

先達が私にいった、「門をはずしてもらおう」

つつましくかにお頼みするが、

「恭々しく私は天使の足もとにひれふして

門を私のために開いてくださるよ様に慈悲を乞い、

まず三たび私の胸を叩いた。

天使は私の顔に剣の先で七つの文字を記した、

そしていった、「中にはいったならば

この傷を洗い落とすよ様に心がける」

……

この鍵を私はピエトロから授かったが、もし人々が

私の足下にひれ伏すならば、たとえ間違おうが
門を閉じるよりは開くが良い、といいつかっている」
と書いて聖なる門の扉を押し開いた、

「はいれ、だがおまえらに注意しておく、
後ろを振り向くものなら、また外へ戻ることになるぞ」

(煉獄篇第9歌、平川祐弘訳『神曲』河出書房新社刊)

「そこに一つの門とこれに至るため下る異なる色の三つの段と、またもの言わぬ一人の門守とを私は見た。そこに向かい、目をいよいよ開くや、上の段に坐しおる者を見たが、その顔に私は耐ええなかつた。彼は白刃を手に、その光線を我らの方に反射させたので、私はしばしば顔を上に上げようとしたが徒らであつた。……我らは第一の階きざしに来た。これはいと清くなめらかな白い大理石にて、私の姿はさながらに映し出たされた。」
有るがままの自分の姿がここへ映されて、どうにもならんと。

「第二は、暗紫よりも色濃く、縦横にひびの入った荒い焼けた岩であつた。その上の第三の階は血管より迸る血の如く、炎々たる白斑、宝石の紅のように見える。」

ダンテは何を言おうとしているか分からない。けれども、大体の見当はつく。即ち、有るがままの自分の姿を見て、そして次は、本当に自分を告白懺悔して、そして最後に十字架です。血というのはこのキリストの十字架です。こういった事によらなければ、この門を通って行くことができない。

「その上に神の天使が二つの足裏をおき、金剛石のように見えた閼しきの上に坐っていた。三つの段を越えて高く輪がずれた。懇ろに私を引き連れて立つた。讓つてかの錠をはずすよつに求める。」
讓つて求める、平伏して求めよ、ということ。

「つやつやく身を清き足元に投げ、憐れみて我がためにこれを開くように乞つた。先ず私は、胸を二度打つた。」

「胸を二度打つた」というのは、ルカ伝18章に収税人とパリサイ人との祈りのことが書いてある。パリサイ人はまことしやかに自分の実存を誇つたような祈り方をした。収税人は「もう私はどうにもなりません、憐れんでください」

と言つた。その「胸を打つた」というのは、この収税人の姿なんです。あそこにと書いてあったでしょ。

「剣の切っ先で七つのP(罪)をわが額に記して、汝の内にあるこれらの傷を洗えと言つた。」

「罪」はイタリア語で peccato (ペッカト) という。「七つの罪」が額に書かれ、それをだんだん消される、煉獄の山を登って行つてだんだん消される、ということ。これはカトリック



ク的な考え方で、それ自身はなにも悪くはないけれども。七つの罪は何かというと、傲慢、妬み、怒り、怠け、貪り、貪食どんじよく（暴飲暴食）、邪淫の七つです。この七つの罪の配列が、一番下が一番悪い。やっぱり傲慢が一番先にきている。

「且つ、彼は聖門の扉を押し、上へ入って来いと言った。しかし、後を顧みる者の外に帰るべきことを汝らに知らず。」

入ったら、後を向いてはいかんと。神の国の歩みを始めて、この世に引かれているうちはだめだ、後をみてはいかんと。

「手を鋤すきにつけてのち、後を顧みる者は神の国の適かなう者にあらず。」（ルカ9・

62）

とある。躓いても、転んでも、倒れても前進あるのみと、こういうことです。

人間はね、どうせみな同じことですよ。

「あの先生は偉いの、偉くないの」

と、そんなくだらないことはよした方がいい。キリストですら、

「なんぞ我を善きと言うか」

と仰ったではないですか。

私が「無」と言っているのは、そういった一切の条件だの何だのかんだのというものを全部はずした世界です。それはキリストが十字架で私にくださったから仕方がない。私の過去からも、現在からも、未来からも、私ははずされた人間なんです。相対的な人間小池なんていうものは問題でない世界です。私はもうたまらんです、そういうキリストが迫ってくるから。

● 十字架という門

煉獄の門はちよつと今言いましたけれども、そこで大事なのは、第三の階です。これは十字架が、キリストの血が象徴されている。キリスト教会はみんなこの十字架がかかっていたり、会堂に十字架があつたりするけれども、飾りじゃダメです。あれはシンボルなんだ。

「我は門なり」

というのは、いつも私は申し上げているとおり、「門」の中に「十」の字を書く。十字架という門。こういう漢字はない。この字は私がつくつたんだから通用しないけれども。

十字架という門は既に開かれてあつた。

「叩けよ、さらば開かれん」

「こんなに私は開いているじゃないか、そこでぶつ倒れて入って来い。私はもう既に、罪から本当にはずされた世界を、そういった現実を、私の十字架で開いて、もうお前に与えているんだ」

と。今から1900年も前に、キリストは道を私たちに与えている。ただこれを受けとり



さえすればいい。「求めよ」じゃないんですよ。

「与えているから受けとれ。そうして、いよいよ求めていけ」

ということ。その「求める」のはもう私たちの努力じゃない。内側から来るところのもの凄く迫力でもって進んでゆく。

私は来年の2月で75歳だよな。けれども、おそまきながら、私の人生はこれからだと思っている。「鈍器晩成」という。私は鈍器だから。呑気でも、鈍器でもいい。これは晩成する。だから、これは簡単に死ぬわけにいかない。この福音のためには、また、福音に在っては。

● 神の行為

マルチン・ルターはよく「神の言」と言いました。そうすると、プロテスタントが一生懸命で

「み言、み言」

とやっている。それだつて悪くはないさ、本当の意味では。しかし、キリストが、

「わが言は靈なり生命なり」

と仰った。

「意味じゃないぞ」

と言うわけです。それは聖書を読むのではなくて、聖書を聞く。

『靈なり生命なり』という聞き方を、この文字を通してしているか」

ということ。それは自分をぶちまけてないと、投身してないと聞けませんよ。有るがままに――煉獄のこれと同じだ――真っ白い大理石に映されている。有るがままの自分をそこに投げ出して、体裁はいらんということ。有るがままの自分を

「み言、み言」といって、ルターはなぜ「神の行為」と言わなかったか。それはあるところでは言ってますよ。けれども、私は

「聖書はドラマだ」

と言っている。それはなぜかと言うと、この神の行為に圧倒されて、ぶつ倒されることが大事なんです。たとえば、パウロがキリストを信ずる者を迫害して、意気揚々として進んで行った。ところが、ダマスコ途上で

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか！」

と、そういう声と同時に、キリストの言行一如の力にぶつ倒された。神さまがぶつ倒す行為であろうと、救い上げる行為であろうと、それは何でもい。聖書はドラマだから、非常に行為的なんだ。

ゲーテが『ファウスト』の中で、ファウストをしてヨハネ伝第一章を訳させる時に、

「^{はじめ}太初に言ありき」

ではなくて、



「太初に行為ありき」

と訳させた。「太初に言あり」ではどうもうまくない。「意味あり」でも、「思いあり」でも、「力あり」でもダメ。最後に「行為があった」と、こう訳して初めて気持ちがおさまったと書いてある。さすがはゲエテです。私に言わせれば、意味も思いも力も行為も、これは全部渾然としているんだ。

●十字架の愛の行為

そういう神さまの一番力強い十字架の愛の行為です。

「十字架の言」

とパウロは言ったけれども、十字架という驚くべき言ならざる言、この行為が私たちを贖ったじゃないですか。行為の奥はこの四つが全部入っているところの霊的実体そのものです。口に発すれば、言葉となり、手足に発すれば行為となる。

「言うは易く行ふは難し」

なんて、そんなことではない。あんなことを言っているうちは、いつまでたつてもはじまらない。元は一つなんです。もうやりきれんですよ、神さまの世界はね。

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの、この四つの福音書は何と言つても、聖書のアルファ（始）でオメガ（終）です。キリストが自現している世界ですから。聖書の中は祈りの場である。何処でもこれ生命の場である。

福音書にぶつかつて、あなた方、

「私はもうしようがない。福音書を聖書から破り取つて、ポケットに入れて、どこでも読んでやる。どこでも祈りの場である。どこでも生命の場である。一日、飯なんか食べなくなつて、聖書の文字を食べていけば、生きていける」

というくらいのことを本当にやつてください。若い人はそれくらいの魂にならなければダメだ。聖書という本はそういう本なんです。

「どこまで、本当にキリストが言つたか、言わなかつたか」

なんて、くだらない研究はいらない。この誤訳だらけの、いろんな写本があつてどうのこうのと言うけれども、どんな聖書学をやつたつて、聖書の奥から発しているものは絶対に破れない。破れ衣なんだ、この聖書というのは。破れ衣の奥の世界がある。マルチン・ルターは聖書のことを「かけら」とも言った。

「神さまの言葉はこんなものに盛りきれないんだ」

と。そういう世界です。私は告白しながら、もうその世界に入っちゃっているから、全身が熱くてしょうがない。あなた方も耳で聞いていたらダメですよ。



● 針の孔

なぜ、「狭き門」とキリストは言われたか。

「²³イエス弟子たちに言い給う『まことに汝らに告ぐ、富める者の天国に入るは難し。²⁴復なんじらに告ぐ、富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し』」（マタイ19・23～24）

「針の孔」というのは、「針の孔」という名称の門があった。ラクダが針の孔を通るなんて、キリストはとんでもないことを、いくらなんでも「白髪三千丈」以上の形容をなさると私も思ってた。ところが、エルサレムの古本屋さん聞いた。すると、すぐに答えた、

「あれは針の孔という名前の門があったんです」

と。それでもう釈然とした。「針の孔」というのは非常に狭くてラクダがやつと通れるか通れないかの「狭き門」です。だから、何物も携えて通ることができないという、狭き門というの。この頃の日本の入学試験みたいなのを言っているんじゃない。何物も携えて通ることができないから、裸で通れ、無一物で通れ。無一物なら通れる門だということです。

● 三相一貫・一如

資格も何もいらん、肩書も何もいらん、物も何もいらん、そういう門です。

「私はそういう門だよ。お前は有るがままの自分自身で、何物も携えないで来い」

と。キリストとそのぶつかりをして、それで十字架の贖いをいただく。我という我執者は、自主だとか自由だとか勝手なことを言ってるけれど、とんでもない。我々はみな我執者だ。我々はみんな「罪びと」だ。

「我執そのものであるお前は罪びとだ。それは全部、私が引き受けた。十字架という門が、十字架が全部引き受けた」

と。それをパウロは別な表現をして、

「我はキリストと偕に十字架せられたり。我生く、されど最早我に非ず、キリスト我が中に生き給うなり。」（ガラテヤ2・20）

と言った。その

「キリスト我が中に生き給うなり」

というところをみんないい加減にしている。十字架されたと思ひ込んで悪くはないけれども、思い込みではダメです。人間はいくら十字架を信じ受けとつても、相変わらずダメな自分というものは残っているね、現実。そんなことは気にすることはない。キリストは、「その奥に、もはやそんなものを問題にしないところの贖いがお前に来ている。聖書の主人公は私（キリスト）だが、お前の主人公の中心は聖霊だ。その聖霊をお前にやる」

と仰る。だから、十字架を通らなければ、聖霊は来なかった。福音書の弟子たちは、どん



なにキリストの近くにいても聖霊は臨まなかった。現象的には時にはあったよ。だめだよ、そんな現象は。

「十字架の贖いを通して本当に祈って待つていろ。今度は助主たすけぬし、御霊みたまがやつて来るから。それが本当の真理の実体だ」

と。そうしたら、本当にそうだったでしょ。福音書のペテロと、使徒行伝のペテロはガラリ違う。これは聖霊が来たからです。いわゆる信仰じゃない。どうしていつまでも

「信仰、信仰」

と言っているんですかね、キリスト教界は。「信仰」という字が躓つまずきになる。私が今度は「聖霊」と言おうと、

「あれは聖霊派だ」

なんて批判する。「派」でも何でもありませんよ。「十字架と復活と聖霊」を、私は絶対に切らない。この三つは三相一貫さんさういつくわんしているんです、三相一如さんさういつくわんです。だから、

「キリスト我がうちに在りて生くるなり」

とは、

「キリストの御霊が私の中で生きている」

とパウロは言ったわけです。パウロはそういう表現をいちいち、いわゆる厳密な言い方をしない。言葉の弾力性のある響きがわからなければダメです。

●生命に至る門

「狭き門」というのはそういうことです。

「生命に至る門は狭く」

とある。生命とは、御霊が与えるところのものが生命なんです。キリストの生命は聖霊を受けなくては来ない。復活したキリストをただ思っただってダメなんです。それはロマンチックな思いであるに過ぎない。聖霊せいれいという生命せいめいに至る門かどは、十字架という門は裸で行くところなんだ、「狭い」というのは。狭いところを通ると、今度はそこが広くてしようがない。広大無辺な、詩篇23篇のように、緑の牧場、憩やすみいの水濱みぎわという。

福音とは何と楽しい世界だろうか、何と掛け替えのない世界だろうか。皆さんは、何だか知らないけれども、頭でなくて、身体で受けとってくださいたでしょうね。私は語りながらいよいよ求める、いよいよ開かれていくだけの話。皆さんは聞きながら。語るも聞くも同じことです。その世界に入れればいい。信仰とはそのような現うつである。現実なんです。永遠の現実、滅びない現実。今ぶっ倒れても、絶対に滅びない現実なんです。それが本当の生命の世界です。



●エン・クリスト

まあ、大変なひとですよ、イエスというかたは。桁違いです。もう、福音書のキリストに圧倒されてしまう。

「一体そんなことがあるでしょうか」

じゃないですよ。皆さん、驚嘆してぶっ倒れてその世界に入ってごらん下さい。キリストと一緒に湖の上を渡るような気持ちになっちゃうよな。ペテロは始め少し渡つたよ。ところが、風が吹いたら、波を見て恐れたら、沈みかかった。あの通りです。

この集会を始める前に、ある方が首が動かないと言って来られた。むち打ち症でも何でもない。とにかく動かない。それはいろんな苦難を通つて来られた方です。私は本当にキリストの中に入って祈りました。すると、もうその方は楽になってしまった。私みたいなやつを通して、今までにいろんな人を神さまは助けてくださいました。脊椎カリエスが治つてみたり。

私は何者でもない。ご利益を言っているのではない。また、現象を言っているでもない。根源の現実になれば、それが治るか治らないかは、どうでもいいですよ。現象では治らなくても、根源では治つているといふ現実をはつきり受けとつていくんです。現象面は神さまがいいようになさる。受けとるのは根源の現実なんです。どうせ、人間はみな死にますよ。ここにいらつしやる方は大体まず、七、八十年たてば、みんな向こう側なものな。私なんかはあと何年で向こう側に往くか知らんけれども。

「汝今日、私と共にパラダイスなり」(ルカ23・43)

という毎日を生きていれば、地上が既にパラダイスである。どんなに世の中が冷たかろうが、曲がつていようが、絶望的であろうが、キリストと一緒にいて、キリストの御霊が自分の中に在つて

「我汝のうち」

という、

「エン・クリスト(キリストの中に)」

というこの現実になると、勝負あります。絶対に行き詰まらない。それでなかったら、つまらないですよ、信仰なんて言つたつて。そうでしょ、魂はごまかしがきかないからね。

そういう世界に本当に自分が生きていのかどうかは、人に説明は要らん。自分が本当にそこにあれば、もうそれでいいんだよ。人をその世界に入れたくつてしようがなくなる。そういう現実を分かちたくてしようがなくなるから。

私はよく、今度だつて新幹線に乗つかつていて、隣に坐つている人と話をする。いきなり、話もなかなかできないから、ミカンを持っていつて、

「ミカンをお上がりなさい」

なんて言つて、ミカンと一緒に食べると、今度は、向こうが気が楽になるものだから、い



ろいろ話します。そのうちに、福音の話になってしまふ。

「あなたは どうしてそんなに若々しいか」

なんて聞いてくる。

「実は、こんなわけです」

と。もう少し話したかったけれども、もう京都に着いてしまった。どこだつて、本当にみんなは求めているんです、無意識に何かを。

●御霊の世界は自由自在

その先は狭くない、広々としている。御霊の世界はもう自由自在なんです。我々はキリストのほかにも何事も要らん。そして、行き詰まったと思つたら、どっこい、そこが本当に開かれている。

「^せ為ん方つくれども^{のぞみ}希望を失わず、倒さるれども^せ止びず」

とパウロが言った。 あんなのは言葉じゃないですよ、パウロはやりきれないで叫んでいる。コリント後書11章に書いてあるとおり、あの多くの患難を突破して行つたんだから。キリストの生命が、力が、彼をして推進せしめた。

皆さんの中にも、自分の思いもよらなかつたことが起きて来るし、またそういったものがやつて来るから。我々の賜っている才能とか資質はいろいろです。胡瓜^{きゅうり}は胡瓜、茄子^{なす}は茄子にしかならない。鼠は鼠なんだ。獅子は獅子なんだ。けれども、それが本当に神の栄光を現すか、現さないかだけが問題なんです、人生の目的は。人にはどんなに見えようと、そんなことはどうでもいい。勳章なんかもらわなくていい。なにも、勳章をもらった人の悪口を言っているんじゃないですよ。孟子も、

「^{しやく}人爵に非ずして、^{てん}天爵なり」

と言つたでしょ。天地一如の天的現実を本当に生きていく。

もう何と言いましようかね、20世紀は希望^{のぞみ}がない。人間の世界に、希望なきところに希望がやつて来るんです、神の国の希望が。どうなるうとも大丈夫です。政治家もイデオロギーを越えなければダメですよ。神さまは誰に向かつてても全的に臨んでくださっている。その人に無くてならない角度をもつて、誰でもが天下一品につくられている。みんな使命を持つて存在している。人を羨む^{うらや}ことは一つもいらぬ。どんな状況に置かれても、状態が相対的に悪ければ悪いほどキリストは近い。イエスはそういう人たちを相手にして天国を現じて行つたのです。「俺たちは」なんて、威張り腐っている、そんなパリサイ精神はキリストの敵だつた。

●大自然のように

祈りとはちょうど、気とか風のようなもの。これはみんな同じ字です。静かな沈黙の祈



りも祈りです。自分の家で、書斎で、寢床の上で、祈るときは沈黙の祈りだね。私もそうだけれども。沈黙の祈りが実は一番深いね。だから、今晚はこうやって、黙ってみんな祈ったって悪くないですよ。それから、ささやくような静かな祈り。それから、嵐のような祈り。いろいろあります。いろいろあるから、人によつていろいろなんだ。

「あんな祈りはいやだ」

とか、何とかかんとか。それではダメです。バラを見れば、バラとならなくてはいけない。本当に花を見ているひとは、花の中に入って、自分がバラとならなければ、本当は見えない。どうして、バラになれるんですか。太陽の光が、また大地の養分がこれを作っている。その角度から、その現実の中に入っていく。

神の栄光を現している野のユリに——アネモネでもユリでも、バラでもいいよ——

「**栄華を極めたるソロモン**だに、その**服装**この花の一つにも及かざりき」(マ

タイ6・29)

と、神さまの栄光をキリストが見られた。

ですから、祈り方はどうでもいい。嵐のように祈るひとがあつたら、自分も嵐になればいい。

「俺は嵐はいやだな」

なんて。嵐が来たら嵐になり、無風だつたら無風になり、そよ風だつたらそよ風になる。そういつた柔軟な魂にならなければダメですよ。大自然のように。キリストを受けると、その大自然のようなことになる。

何て言うかね、私みたいなちっぽけな人間がどうしてこんなことになつてしまったかと不思議でならない。仏教のものを読めば、仏教にも素晴らしいものがあるから、本当に敬意を表します。ただ、それは私はみんなそれをキリストの光で見ているから。私が自分の主観で見ているのではない。全部それを包摂してしまう。全部、消化してしまう。ダンテであろうと、ゲーテであろうと、ドストエフスキーであろうと、漱石さんであろうと、何であろうと。何を讀んだって、これが読めるからおかしいんだよ、本当に。それは難しいものは、勉強しなければ分からないところもある。けれども、内容的に、これは困つたなんてことはないわけです。キリストというのはそれだけの凄いひとです、聖霊の世界は。何か、女の方が仕事をなさる。大工さんがカンナをかける。聖霊は何にでも働いてくるんです。だから、学生だつたら、勉強が面白くてしょうがない。

「今までは覚えられなかったものが、どうして、こんなに覚えられるようになってしまったか」

と。これは天来の本当の元気なんです。「元の氣」がくるから。空元気ではない。

どうぞ、そういうことで、楽に、あるがままに祈ってください。そうすると、異言なんてものが出るかも知れない。人間の言葉でないような音を発したりするかも知れない。あるいは、霊的な歌がうたわれるかも知れない。まあ、第一回は、そこまで行かないでくださいよ。



行っただっていいよ。ただ、私は新しい方がびっくりしないように、申し上げておきます。まあ、全体としては、静かに深く祈りたいと思っただけですけれども。何も制限はしません。

● 祈り

では、祈ります。

主さま。今晩はこのような素晴らしい所を与えてくださり、兄弟たちの隠れた準備を感謝いたします。今ここに集まって来られた兄弟姉妹たちは本当に、主さま、あなたを求めて来られました。

「*kyria eleen*、与えられん」

とは、主さま、あなた自身が私たちの中に来てくださいました。体当たり的に、私たちは、語るも聞くも同じく、あなたの門を叩きました。ぶつ倒れたらば、あなたが本当に常に開いていらつしやることに気がつき、その中に入れば、本当に緑の野、憩いの水汀みぎわでありました。何のこだわりもありません。感謝いたします。福音とはなんと素晴らしい世界か。

どうぞ、この兄弟姉妹たちが日々聖書に向かうときに、ご飯を食べるよりもっと楽しく聖書を食らうことができますように。その一言一句を本当に身につけて、その現実となり、そして、あなたを本当に「主さま」と呼びたてまつれば、直ちに、

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

の現実の中に入って、進んで行くことができますように願いたてまつります。

あなたの世界は無条件です。無条件に与えようとしてくださる、そのあなたを———空気は無条件に私たちはさらされておりますように———あなたの聖霊は、その十字架によってすつ飛ばされた、この真空のところにも本当に入ってくださるから、感謝であります。かくして、私たちの中に、何かは知らないけれども、本当の生命が、本当の現実が、本当の光が浸透し、もはや表現することのできないものであることを感謝いたします。何がどうなっても、どう行き詰まっても、いや実にあなたは必ず道を開いてくださり、助けてくださり、また、創造的な業を成してくださいますから、感謝であります。どのような運命環境にあっても、キリストがいらつしやる場所に一切はある、一切は開かれていく、一切を荷なつて本当に敵をも愛することのできる力がくることを、神さま、感謝いたします。

どうぞ、このキリスト教の世界が、プロテスタントだの、カトリックだのと言っておらず、本当に元始の使徒たちと同じ現実に私たちが入っていくことができますように、そここの集会において、あなたが光を与えてください。聖霊を降くだしてください。お願いいたします。この兄弟姉妹たちと共に、このような第一回の集会を迎えたことを感謝いたします。

今、心からの感謝と讃美、祈り、兄弟姉妹たちのそれと共に聖名にあつて捧げたてまつる。
アーメン

